

心の  
諸問題  
について II  
に

山上 頼男

*Yorio Yamagami*

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

心の  
諸問題  
についてⅡ  
に

山上 頼男

*Yorio Yamagami*

文芸社



目次

- 一 同じ過ち——世代による循環 『父親崩壊』 妙木浩之著 7
- 二 結婚生活がうまくいくための条件
- 三 「こころの科学」122号、水田一郎「恋愛・結婚・離婚の心理学」 13
- 三 精神分析とメルヘン 『メルヘンの履歴書』 宮下啓三著 22
- 四 統合失調症について 「こころの科学」86号、山口成良「脳器質論の歴史」 34
- 五 家庭とは 『ドゥーイング・ファミリー』 小此木啓吾 47
- 六 抑うつ態勢（抑うつポジション）について
- 七 「現代のエスプリ別冊 オールアバウト『メラニー・クライン』」、中川慎一郎「ポジション」 53  
精神分析家クライン
- 七 「現代のエスプリ別冊 オールアバウト『メラニー・クライン』」、松木邦裕／椋田容世「精神分析家クライン——そのプロフィールと業績」 59
- 八 壮年期のうつ病
- 「こころの科学」146号「特別企画・うつ病は治るか」、天野雄平／塩入俊樹「壮年期のうつ病」 66

九 中高年の創造性 『新編 創造力事典』高橋誠編著 75

十 内的な不安と受容の欠乏感

『自己成長の基礎知識1 深層心理学』R・フレイジャー＋J・ファディマン編著 80

十一 子どもの愛情への基本的欲求について 『マズローの心理学』フランク・ゴープル著 88

十二 青年の自立心について 91

十三 母と娘の神話、物語 『母を支える娘たち』高石浩一著 95

十四 現代家族は崩壊したのか

『「家族」はどこへいく』沢山美果子／岩上真珠／立山徳子／赤川学／岩本通弥著、「都市化に伴う

家族の変容」岩本通弥

104

十五 思惟の形式とは 『子どものためのカント』ザロモ・フリートレンダー著 116

十六 男性的創造 『愛と性と母権制』エーリッヒ・フロム著、ライナー・フンク編 121

十七 ふさぎ込み——憂うつを乗り越えて

『感情はコントロールできる』D・デインクメイヤー＋G・D・マッケイ著 127

十八 依存性の形成 『自分で決められない人たち』矢幡洋著

十九 道徳性の発達 『哲学と子ども』G・B・マシユーズ著 153 142

二十 友だちづくりの心理 『母親に語る「しつけ」の精神分析』小此木啓吾著 161

二十一 社会的自己の確立 『社会精神医学』（日本社会精神医学会編）、「青年期」西村良二

おわりに 177



## 一 同じ過ち——世代による循環

『父親崩壊』 妙木浩之著（新書館、一九九七年刊）

### 梗概

結婚するならば、女性は相手の男性の母親を見よ、男性は相手の女性の父親を見よと言われているが、それはいったいなぜなのか。人はそうとは意識しないで自分の親とどこかに似ている人物を相手に選んでいるためであり、異性に好かれないと思ったなら、「その異性の異性の親」を参考にすればいい。

崩壊した家庭の娘の場合、どんな男と結婚しても、自分自身の父親よりも夫の方がまともな見え、よく見えるに違いない。そう思うのが普通だろうが、この発想の中には「宿命の力についての甘い幻想」が含まれている。すなわち、崩壊した家庭の子どもは、家庭を崩壊させた家族の誰か（親や兄弟姉妹）の「家庭崩壊的な要素」を自分の中へ無意識に取

り込んでいることがある。

たとえば、ある男性は、小さな頃に両親が離婚したため母方の祖父母のところへ長期にわたって預けられ、寂しい思いをした。そのため、家庭だけは崩壊させたくないとの思いが強く、自分の母親とはまったくタイプの異なる女性を妻に選んだ。ところが、彼があまりにも家庭的すぎ、妻にもベタベタしすぎたために、妻は「縛られるのは嫌」と言い、家を出ていってしまった。

「内在化<sup>\*</sup>」されるのは、その対象の側面（ここで言えば母親のタイプ）だけでなく、関係（夫婦関係）そのものなのだ。そのため、傲慢で家族を人間扱いしない父親の下で育った女性が、意識して「やさしい父親」を夫に選んだ場合でも、今度はその女性自身が傲慢になり、夫を人間扱いしないというところでもない夫婦関係を知らず知らずに反復することも珍しくない。

世代という概念は、比較的近代に入って以降のものであり、「核家族の基本的な構造」ができてから現れてきた概念である。家族の場合には「世代間反復」という考え方も示されていて、世代ごとに微妙に変化し、二〜三代目あたりで一巡するとされている。

「臨床的にも、精神障害で明らかに世代間の伝達がおこなわれている例には、たくさん出

会」う。だが、それは「ほとんどは無意識的なこと」であり、「親が悪い」とか「生まれが悪い」といったことではない。また、「祖父の世代で非常に厳父であり、次の世代はその父に同一化しているものの、自分で地歩を確立したわけではない父親、そしてその不完全な父親を見て混乱してしまう三代目というのは、いかにもありそうなこと」であり、「三代目没落説」もしばしば耳にする説である。

家族や共同体はおおむね二〜三代目、年数に直すと六十〜九十年で一巡すると思われるが、没落や神経症的循環という悪い反復、悪い循環だけではなくて、健全な反復・循環もあることを忘れてはならない。

\* 内在化 相手の特質を自分のものにしてしまうこと。

#### コメント

結婚するとき、女性は相手の男性の母親をよく見た方がよい、男性は相手の女性の父親をよく見た方がよいと言われています。その親たちに好かれれば、結婚生活がうまくいくという心理があるのでしょうか。しかし、結婚相手が「崩壊家庭」の子どもさんである場合には、崩壊原因をつくった家庭内の誰かの悪い癖を取り入れてしまっているかも知れませんが。つまり、悪い癖が無意識に移ってしまい、「崩壊人」と同じ考えと行動をとることが

あると忠告しているのです。

たとえば、離婚が家庭崩壊の原因であるとき、夫婦のどちらか一方だけに原因があったと言われているても、実際には夫婦が二人とも悪かったのだと考えられます。それと似たようなことですが、傲慢な父親に育てられた娘さんが意識してやさしい夫を選んだとしても、自分自身も知らない間に世代間反復を行うとも言われているのです。すなわち、この娘さんは無意識に、夫婦のどちらか一方が傲慢であるような家庭を望んでしまい、自分自身がだんだんと傲慢になっていくと言います。なぜなら、娘さんにとっては経験のある環境・行動であり、よく分かっているのです。それが安心なのです。

三世代目没落説も似ています。一代目は厳父で、二代目は一代目と同一化しているのですが、目下の地位を自分で確立していないという不安定さを持っています。そして三代目ともなると、二代目であるがゆえに不安定な心を持った不完全な父親を見て混乱し、没落すると言います。このように、家族や共同体でも三世代で一巡すると考えられており、そこには以上のような心理が働いていると説明されているのです。

思いますに、明治時代の男性は厳父を押し通し続けていましたが、夫婦ともどもなんとかうまく過ごしていました。夫は妻の労力も充分に理解し、大きな包み込むような眼ざしまな

で見守っていたと想像します。厳父を支える妻がいたので、厳父たりえていたのでしょう。私事で恐縮ですが、私の父母も明治生まれで、私も小中学生の頃は母に従い生きていました。その後、高校生になると、自分と母とは考えが違うようだと思ふようになったのですが、それでも母を信頼し続けていたのです。

母には、父に逆らうと生きてはいけないという考え方がありました。そのため、子ども心にも母がとても気の毒でした。父の機嫌が悪いとき、母は無口になりました。それでもしばらくすると、父をなだめたり、落ち着かせるため言葉をかけたりするのです。すると、そのうちに父は自分も悪かったと思うのか、普通の会話に戻っていききました。

そんな様子を私は黙って見つめていました。母は辛抱強い人でしたが、ときどき父のいないところで「あの人（父のこと）はそんなことを言うけれど……」などと独り言をぶつぶつ言っていました。それでも母は、決して父を馬鹿にしたりはしませんでした。また、子どものことになると母は父ともけっこう言い合って、子どものことを父よりもよく理解していたのです。俗に言う「勝手な父親」と「耐える母親」であったように思います。

時代は、明治↓大正・昭和↓平成と、明治から数えて三世代目に至っています。この本の内容に沿って考えますと、日本は没落の時期に入っています。いや、そうではなく

て、健全なサイクルの方かも知れないですが、いずれにしても、われわれに幸せをもたらす社会であってほしいと思っています。

## 二 結婚生活がうまくいくための条件

### 二 結婚生活がうまくいくための条件

「こころの科学」122号「特別企画・家族のこころ」（日本評論社、二〇〇五年七月）

「恋愛・結婚・離婚の心理学」水田一郎（同誌所収）より

#### 梗概

結婚生活がうまくいくための条件とは何だろう。二十年以上も前のことだが、スイスの精神分析家ヴィリは『夫婦関係の精神分析』を著して、カップルの関係がうまく維持されるための条件として、①境界設定、②発展的・**退行的**<sup>\*</sup>防衛態度、③等価性のバランスの三つを挙げた。これらは、現在の日本のカップルにもある程度は当てはまる。しかし、いずれの条件も「自己愛の問題や我慢の欠如」が原因で維持するのが困難になっているようで、近年、カップルの関係が長続きしないで破綻しやすくなったのも、ヴィリの視点から説明できる。

## ①境界設定

「二人の間に境界がある（相手は自分とは違う人格であり、自分とは違うことを考えており、自分の思い通りにはならない）ことを認められない人が増えている」

そうした人たちは、以前はだいたい恋愛妄想や人格障害などという深刻な精神病理に關連づけて論じられた。ところが、現在ではそれほど病理的ではない人にこのような傾向が見られることもあまり珍しくはなくなった。

「カップルの間の些細な喧嘩や、それほど些細でない諍いも、中身をくわしく分析すれば、その多くに、実はこの境界無視や境界侵犯の問題が絡んでいるのではないか」

二人とその他の人との間にしっかりとした境界を引けない人や、反対に硬すぎる境界を引く人も今ではたいへん増えている。たとえば、古典的な嫁・姑問題でも、黙々と耐える嫁は激減している。これはヴェリ流に言うならば、境界の「緩さ」を夫が許容している場合には、妻は夫に激しく抗議し、抗議してもだめならば、ただちに離婚が選択される（逆のパターンもある）。

「二人と周囲の境界が硬すぎるこの問題は、核家族化のもたらす諸問題の心理的側面とも関連を持つ。二人の間が危機状況に陥っても、周囲のサポートがあれば、それを何とか

持ちこたえたり、修復することができるかもしれない。しかし、二人と周囲の間の境界が硬すぎると、そういうサポートは得られない。二人の関係は崩壊するしかない」

② 発展的・退行的防衛態度

大人の態度（役割）と子どもの態度（役割）の二つがあつて、二人の関係の中で二つの態度（役割）が柔軟に交代できればいいのだが、それができず、もう我慢できないと思うケースが以前より多くなっている。たとえば、ある男性は、二人の関係の中で相手の女性をいつまでも子ども扱いし続けて、依存的な地位にとどめておこうとするのだが、これなどは男尊女卑的な考えと言うしかないだろう。男尊女卑的な男性こそが実は心理的には子どもそのものなのであり、常に相手に対して「よしよし」をしてくれる母親の役割を強要している。

また、二人とも子どもの態度（役割）を自分が独占しようとして奪い合いになるのも問題である。その結果、関係が破綻してしまうこともある。もちろん、彼らもある程度は妥協することにより社会で生きてはいけるのだろうが、カップルとなると難しい。二人の間で親密な関係を築こうとしたとき、困難が生じてくるだろう。

「ここでもまた、我慢のなさや自己愛は大きな役割を演じるであろう」

### ③ 等価性のバランス

「等価性のバランスというのは、二人の自尊心が等価、つまり、お互いに、相手のことも尊敬しているし、自分のことも、それと同じくらい尊敬しているということである。この等価性のバランスが、二人の良好な関係や、お互いの成長・発展のために重要な役割を果たすとヴィリは言う」

等価性とは、「自尊心の等価性」のことを言い、社会的な地位など外的なものを含まない。たとえば、夫が出世したとき、出世して地位が上がるのは夫であるが、出世には妻の存在や貢献が必要不可欠だったと夫婦がともに認めていけば、妻も夫とまったく同等であると感じられる。言い換えれば、夫が仕事上で達成した出世という栄えある結果を、妻も自分の成功として受け止めることができるのである。

「経済力、若さ、容姿、資格等々、外からはつきり見えるものによって自尊心を保とうとする心理は、近年ますます強くなっているように思う。外的なものに支えられた自尊心は、内的なものに支えられた自尊心に比べ、変化しやすいのが常である」

例を挙げると、会社が潰れて失業したため、経済力がなくなった夫を見捨て、たちまち家を出ていく妻がいる。また、自分より遥かに年下の女性（たとえば二十歳年下の女性）と

## 二 結婚生活がうまくいくための条件

再婚する男性もいる。この場合には、内面よりも、経済力や若さ・容姿という外から見えるもので相手や自分を評価して、さらには、どういう相手と一緒にいるかが自尊心の重要な基準になっている。

### おわりに

カップルの関係性に関わる愛には、性愛、愛着、自己愛という三種類の愛があるのだが、近年は、性愛や自己愛ばかりをより満たそうとする方向に変化している。そして、残る愛着は、育てることがますます難しくなっている。大人同士二人の愛着と親子間の愛着は同じものではないのだが、

「しかし、あらゆる対象関係が、幼児と親の関係をその鋳型として発展し、多かれ少なかれ、元の親子関係を反復するという精神分析的視点に立てば、カップルの愛着と親子の愛着の間には、本質的な共通部分も少なくないはずである」

性愛、自己愛の二つが強く、愛着が相対的に弱くなってしまったカップルの関係性における潜在的な問題は、二人がともに非常に深いレベルで安全感の揺らぎや強い孤独感に悩むなどすることである。問題はそこにとどまらず、それに対処するために四苦八苦するといった事態が増えていくに違いない。

\* 退行 子ども返りのこと。

#### コメント

ここでは、「あらゆる対象関係が、幼児と親の関係をその鑄型として発展」すると言われています。これは「元の親子関係を反復」という意味であり、カップルは互いに相手の実家を参考にしながら二人の結婚生活を始めることになるのです。

男女の違い、年齢の違い、性格も少し違っている点を考慮しますと、互いに努力する必要はありますが、一人で生きるより二人で生きる方が人生も豊かになりますし、かつ互いに不足を補い合いながら何かを創造していける可能性が高いと思います。

ところが最近では、忍耐力がなく、忍耐をつける訓練もせず、大人になれていないカップルが結婚生活を始めます。そのため、互いにかんりの努力が必要となっているようです。攻撃心が強すぎたり、自分自身の責任を放棄したりすることが問題となっているのです。

私の両親はともに明治生まれです。明治生まれの人たちは相対的に今より辛抱強かったと思います。母は父に気をつかい、一家を支えていました。また、朝は必ず一番に起き、夜も必ず一番遅く寢床に入る母を見て、子ども心にも母にはとても逆らえないと感じたも

## 二 結婚生活がうまくいくための条件

のでした。そんなことは当たり前前の時代でした。

一方、私の妻の両親はともに大正生まれです。大正デモクラシーの時代には、従来の諸制度や諸思想の改革が試みられました。そのせいか、どちらかと言えば義父よりも義母の言葉の方が強そうでしたし、気をつかっていたのも義父の方だと感じました。

また、私自身を振り返ると、私たち夫婦の意見の違いは、どうやらそれぞれの元の家族の意見の違いが反映されていたようで、親の影響力あるいは時代の影響力は相当なものだと痛感します。しかし、私たち夫婦は、現在は互いに「**変容性内在化**\*」の方向に歩んでいるように思います。すなわち、より良い方向に向かってきたと私は思っています。

若い人へのメッセージとしては、自分が属する時代に合わせて生きていくようお勧めします。

現代は人格障害の時代とも言われ、困ったことだと思っています。これはどんなことかと言いますと、ロシアの小説家ドストエフスキの作品を読んで下されば理解できると思っています。ドストエフスキの作品は、「頑固でわがまま」な思い上がりの強い人格障害者たちのオンパレードで、現代の日本社会にもそれが広まりつつあるのです。

犯罪は、そのおかしな人物が一番悪いと考えられています。そんな人たちと話してみ

ると、まず「ひねくれ」を語ってくるのです。これは「子ども心」から来ていることだと思えます。そしてしばらくすると、今度は「自分本位」が語られるようになってきます。それをだんだん強く押し出してきて、最後には強引さまで感じさせるようになるのです。そのうえ協力まで求めてこられると、相手を支配しようとしているのかと疑いの気持ちが出てきて、こちらとしては次第に心が離れてしまいます。相手を操作しようという行動であり、こんな人物はたとえ犯罪にまで至らなくても危ない人物と言えます。

彼らの芯には原始的な「子ども心」の部分があり、その周りには正常な大人の心もあるのでしょうか、二つの心理の境目（境界）に住んでいるために、大人でも子どもでもありません。言い換えれば、大人になり切れていない未熟な人であり、キレやすく、たちまち「子ども返り」をしてしまい、大人との安定した対人関係は結びにくいのです。なんとか大人に近づいてほしいものですが、犯罪に手を染めやすいとも言われています。その特徴は責任を感じないこと、思いつきで行動する、犯罪は悪事です。心が問題を抱えた時代です。

以上のような困った時代に生きなければならぬわれわれに求められているのは何でしょうか。それは倫理観とか哲学であると思えます。その原点となるのは、これからの小学

## 二 結婚生活がうまくいくための条件

校、中学校での教育であると思います。この点での基本はやはり、家庭ではなく学校での教えにあると信じています。

この時代をどう生きるのかが、われわれに与えられている課題です。どんな結果を手にするのかは、後世の人たちが見守るといふ、歴史的にも意味の深い時代です。

**\*変容性内在化** 現実の生活体験によって理想化されていた自己対象も不完全な存在なのだと気がついて、自己対象が果たしてくれていた役割・機能を段階的に獲得（内在化）すること。

### 三 精神分析とメルヘン

『メルヘンの履歴書』宮下啓三著（慶應義塾大学出版会、一九九七年刊）

#### 梗概

西暦一九〇〇年は、精神分析学が創始された年である。オーストリアの神経病学者ジークムント・フロイトは、この年に大著『夢判断』（原題：Die Traumdeutung）を著した。彼は夢を分析することにより人間の心の無意識の層に到達しようとした。

その後、二十世紀の初めに、ドイツの心理学者・哲学者ヴェイルヘルム・ヴントは、「原始人の間で悪霊や魔法に対する恐怖心から神話が生じた」とする仮説を立てた。非合理的な不安や恐怖は、何世代も経るうちに、人間の夢の中に現れるようになったと彼は言う。

このような神話や夢についての解釈を受け継いだのが、スイスの心理学者カール・グスタフ・ユングであった（彼はフロイトの弟子だった）。ユングは「集団的無意識」と言い、

メルヘンのそもその発生地点は人間の心の中にあると主張した。彼によれば、「この上なく大胆なファンタジー（想像力）から一定の法則を生み出す、人間に生まれつきそなわっている観念能力<sup>\*</sup>」をメルヘンが表しているという。

「祖先たちの実生活、悩み、よろこびから、それらのイメージが生まれた人間が無意識のうちにいだいていたものがメルヘンに見出される」（ユング）

また、「無数の体験が人間の潜在意識として痕跡をとどめている」と言い、

「現代の合理主義はすべての非合理的なものの価値を否定し、そのため非合理的なものの機能を潜在意識の領域に沈澱させてしまった」（同前）

ユングが示したメルヘン発生の理論やその機能についての考え方に刺激された人々が、メルヘン研究をさらに深化させていく。つまり、メルヘンは心理分析的な検討対象となり、教育学者は児童の心理的な発達とメルヘンとの関わりを検討し、①児童はいわば「未開人」の発展段階にある ↓ ②したがって民間メルヘンの段階にある ↓ ③児童が世界を秩序立てる方法は未開人の現実経験に相当している ↓ ④それゆえメルヘンは未開段階の年齢層にある児童に相応しい読み物だ、とする見方を提示した。

メルヘンに相応しい年齢とはいったい何歳ぐらいを言うのだろうか。ドイツの学者たち

によるならば、四歳から八歳までであるという。この年齢層をドイツ語では「メルヘン年代」と呼ぶのであって、八歳を過ぎると「ロビンソン年代」に移行する。

「以上のように、精神分析学、発達心理学、教育学などいろいろな観点から民間メルヘンの意義や教育効果が議論されてきたし、今でも議論が尽きてはいない。

今ここで言うメルヘンとは、たんにドイツ人の民間メルヘンだけでなしに、世界中で収集された民間説話、つまり民話を総称している。いくつもの学問の分野が相互に力をあわせてメルヘンの本質を説き明かそうとしている。しかし、一九七〇年代の末にドイツのメルヘン学者の一人は、きわめて率直に次のように書いた。『メルヘンという現象についての、万人を納得させるに足る解釈は、まだあらわれていない』。

すべてまだ試みの段階にある」

\*観念 見解とか物事に対する考えのこと。

#### コメント

メルヘンとは、まったくの空想をもとにして創られた物語のことであり、おとぎ話や童話です。子どもたちは昔から、これらを読んで知恵をつけていったようです。私自身がグリン童話を読んだり、その解説を見て理解したりした結果をもとにして、コメントさせて

いただきたいと思えます。メルヘンは、人間の心の中にある心理を語っているとされています。グリム童話にはいろいろな話がありますが、心に残ったものを取り上げて、少しばかり語ってみます。

「子どもたちが屠殺ごっこをした話」

これは私にも思い出があり、子どもの頃にはトンボやセミなどの昆虫やカエルなどの生き物を捕って遊んだものでした。五く六歳という年齢は、幼児から子どもに変化していく過渡期です。この頃は、遊びが楽しければ他のことなどどうでもよいという心理があつて、まるで「王様」みたいな自己中心的でわがままで、欲求の赴くまゝに行動します。

ただし、それも長くは続きません。その後、世の中には自分が想像すらしなかつた「出来事」があるのだと感じ取れるようになります。「こんな場合、自分ならどうするだろうか」と客観的に考えられるようになるのです。そして、他人の痛みや感情が理解できるようになることで大人へと向かっていくのです。

子どもが十二歳ぐらいになったら、子どもの成長に合わせて（親が子どもを抱え込まずに）親も一緒に内面的な成長を遂げるべきだと、子どもの自立を勧める話もあります。

「白雪姫」

この話は母と娘の心理的葛藤を描いています。客観的に見て継母が残忍だといふのはありません。思春期に近づいた少女の側に、自分の美しさに対して母親が報復をするんじゃないかと恐れる心理が存在すること、また、こうした自己の破滅をも招きかねない原因を排除できていない間は本当の幸福は得られないとの解釈が最近ではなされているのです。この物語は、母親へのコンプレックスに取り憑かれた思春期の少女の話です。

「ヘンゼルとグレーテル」

親が子どもをいかにして森の中に捨てればいいのかと、とても苦勞する話です。「捨てられる恐怖」は子どもにとって相当なものであったと思います。死へと導く否定的な母の存在が本当に怖かったことでしょう。なかなか親離れができずにいたり、社会人になっても親離れができていないと、そんな子どもを母親は突き放すことがあるのです。無理矢理母親から引き離されて、途方に暮れる子どもたちも多かったことと思います。

一方、優しすぎる母親も問題がないとは言えません。子どもは十二歳を超えると急速に成長しますので、優しすぎる母親の目にはまるで子どもが魔物のように見えたりします。また、母親は、十二歳を超えた女の子には悪い虫がつかないようにと案じるようになるのです。そして、心配のあまり子どもを束縛したり、世間から隔絶したり、幽閉したり、

さらには「あなたは黙っていないさい」と子どもを呑み込んでしまうこともあり、グリム童話の「ラプンツェル」がそれに当てはまる話です。母親には、子どもを生んで優しく育てる肯定的な面と、子どもを捨てたり呑み込んだりしてしまう否定的な面とがあることを、メルヘンの世界が教えてくれているのです。

「トゥルーデおばさん」

ここでは娘のしつけについて述べています。物語の娘は小生意気でわがままで、両親が何か言っても「はい」と答えたためしがありません。

この娘がトゥルーデおばさんのところへ行ってみたいと言いつ出したとき、両親は「トゥルーデおばさんは悪人だから行かないように」と忠告します。しかし、娘は禁を犯してトゥルーデおばさんの家へ行くのです。すると、おばさんは「お前、光っておくれでないか」と娘に言うや、娘を丸太ん棒に化けさせて火の中へ放り込んでしまいます。丸太ん棒が真つ赤に燃え上がると、おばさんは体を温めながら「おっそろしく明るいじゃないか」と言いました。

この話の根底には「モーゼの掟」<sup>おきて</sup>があると言い、賢い子ならその場を離れて逃げ出すべきだとも言われています。しかし、子どもたちの目には、娘とおばさんとのやりとりや、

娘が丸太ん棒に変えられてしまう場面などでも興味深く映ります。大人が思うほど子どもたちは怖いと感じていないと言うのです。

この娘に注意をしたのは両親だったと書かれています。普通、娘のしつけは、まず母親が行い、娘がどうしても言うことを聞かないときだけ父親に登場してもらうのがよいようです。ところが、話の中の娘は、父親をちつとも怖い存在だとは思っていません。父親は間を置いて叱った方がよいでしょう。つまり、両親が二人とも同時に叱っては、効果はまったくないのです。甘やかす場合も、一緒に甘やかすとよくないそうです。違う時期に、別々に甘やかす方がよいのです。

また、両親があまりにも厳しい禁止を課すと、娘はかえって禁を犯そうとするのです。そんなしつけの話でしたが、グリム童話では、子どもに「死」の罰が与えられるのは「トゥルーデおばさん」を含めて二作品しかありません。基本的には、子どもには優しくとっています。

童話では、表面には現れにくい人間の心の奥の動物的な本性が、カエルやイヌ、ネコ、ネズミ、ヤギ、オオカミ、カラスなどに仮託されて出てきます。彼らは「人間の心の内なる動物」の部分と共鳴しやすく、それが癒しになるのです。人間の潜在的な野性と共鳴し、

悪く言えば人格の未熟な部分と反応しますし、良く言えば元気の素となるエネルギーをそこから得られます。そこで、次はカエルの話です。

「蛙<sup>カエル</sup>の王様」

お姫様が泉のほとりで金のまり遊びをしていたところ、まりが泉に落ちてしまいます。そこにカエルが出てきて、あとで約束を果たしてくれれば、まりを拾ってきてあげると言うのです。そこで、お姫様は約束します。ところが、まりを取り戻したお姫様がさつさとお城へ帰っていったので、カエルは約束を果たさせようとお城へお姫様を訪ねてきます。そして、王様の了解の下、みんなと食事したまではよかったものの、なんとカエルは「あなたと二人で絹のふとんで寝たい」と言い出しました。カエルのあまりのあつかましさにお姫様は怖くなって腹を立て、冷たいカエルをつまみ上げるや、壁に力いっぱいぶつけました。ところが、壁から下に落ちてきたのは、いやらしいカエルではなく、きれいな優しい目をした王子様。そんなことで二人は結ばれ、王子様の国を目指して馬車で旅立っていくという話です。

思春期の頃の少女たちには、男性はたとえ王子様であつたとしても、どこかしらあつかましい（実際そのようなことが多いと聞きますが）、カエルのようにぬるつとした、

# 口絵省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

山上 頼男 (やまがみ よりお)

1939年、京都府出身  
金沢大学医学部卒業  
京都府在住

〔著書〕

『心の諸問題について』（文芸社）

## 心の諸問題について II

---

2010年 9 月15日 電子出版発行

著 者 山上 頼男

発行者 瓜谷 網延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Yorio Yamagami 2010 Corded in Japan

ISBN978-4-286-08802-0

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」

サイト <http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。）

新 10.09.09 Ladybird